様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５３２４０

研究課題名（和文）授業過程評価スケール（修士課程用）の開発－教育評価システムの構築を目指して－

研究課題名（英文）Development of a Scale to Evaluate the Teaching-Learning Process in Lectures at Nursing Master's course -Toward Constructing an Educational Evaluation System

研究代表者
舟島　なをみ（Funashima, Naomi）

千葉大学・看護学研究科・教授

研究者番号：００２２９０９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,000,000円、（間接経費）　600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、多様な背景を持つ看護系大学院修士課程に在籍する学生の授業に対する51評価視点を質的帰納的に解明し、この51評価視点を基盤に授業の過程を評価する『授業過程評価スケール－看護系大学院修士課程用－』を開発し、そのスケールの信頼性と妥当性を検証した。『授業過程評価スケール－看護系大学院修士課程用－』は、看護系大学院修士課程の学生に授業を提供する教員が学生の要望を反映した授業へと改善することに役立つ。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a scale which faculty can use to evaluate teaching-learning process in lectures at nursing master's courses.First,51 criteria which graduate nursing students evaluate the lectures were clarified through qualitative research.Second,the scale was developed on the basis of these 51 evaluating criteria.The scale has good reliability and validity. Faculty can use the scale to improve the teaching-learning process in lectures at nursing master's courses.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：授業過程評価　看護系大学院　修士課程

１．研究開始当初の背景

2006 年３月、文部科学省は、知識基盤社会における大学院の果たすべき役割を重要視し、大学院の人材養成機能の強化、国際的に魅力ある大学院教育の構築が急務であることを明示した。これを受け、国は、大学院教育の質確保の方策として、大学院評価への取り組みを推進し、専門分野別の自己点検・評価促進や第三者評価の導入支援を策定した（文部科学省,2006）。

看護系大学院は、研究者や大学教員に加え、医療現場において指導的立場で活躍できる高度専門職業人の養成を使命とする。また、看護系大学院修士課程は、1997 年より毎年約 10 校ずつ増加しており、これにより教員数の不足や経験過少による「教員の力量不足」、「大学院学生が満足する教育の実施困難」等の問題に直面している（石田他,2009）。また、看護系大学院修士課程に入学する学生は、看護管理者、大学教員、看護実践家などその背景や年齢層は他の学問領域とは比較にならないほど多様であり、多様な背景を持つ大学院学生は、多様な要望を持つ。それらを充足した教育の展開に向けて、適確な授業評価を行い、その結果に基づき授業の改善、質の維持・向上を図ることは、看護系大学院の教育に携わる教員の喫緊の課題である。しかし、学生の要望を充足した授業の実現に向けては、学生の視点に基づく授業評価が必要であるにも関わらず、多様な背景を持つ大学院学生の評価視点を網羅し、それを反映した授業過程評価スケールは、日本のみならず海外においても開発されていない。

以上を背景に、本研究は、看護系大学院における教育評価システム構築の初期的段階に位置する研究として、看護学教員が授業改善に活用できる授業過程評価スケール（修士課程用）の開発を目ざす。授業評価は、教育目標の達成に向けて、「授業過程」と「授業成果」の両側面から行う必要がある（東他編,1996）。このうち、本研究が開発を目ざす評価スケールは、「授業過程」に焦点を当て、学生による評価視点の反映を重要視する。その理由は次の３点に集約される。第１に、授業が教育目標達成に向けた学生と教員の相互行為の過程であり、「授業過程」における学生の要望を充足することは、「授業成果」に多大な影響を及ぼすとともに、学生の授業に対する満足度を向上させる。第２に、学生による授業評価は、教員にとって授業の構造化、適正化等のために貴重な資料を提供する。第３に、教員にとって授業過程評価は、評価結果を次の授業に反映でき、授業改善に直結する。

本授業過程評価スケールは、教員が日々の授業評価に活用することにより、確実に授業改善に役立つ。また、本研究終了後、「授業成果」に焦点を当てた評価スケールを開発し、両者を包含した評価システムを構築する予定であり、これらは、必ずや看護系大学院の教育の質向上に寄与する。

【引用文献】

・文部科学省(2006)：大学院教育振興施策要綱.
・石田貞代他(2009)：専門看護師教育課程をもつ看護系大学院の現状と課題に関する調査研究,山梨県立大学看護学部紀要,11, 87-94.
・東洋他編(1996)：現代教育評価事典,「授業評価」の項,316,金子書房.

２．研究の目的

本研究は、看護系大学院の教育評価システム構築に向け、授業改善に有用な評価スケールの開発を目的とする。この目的達成に向け、第１に、看護系大学院修士課程に在籍する学生の授業過程に対する評価基準を質的帰納的に解明する。第２に、第１段階の結果を基盤に看護系大学院における授業過程の質を評価するスケール（看護系大学院修士課程用）を開発する。

３．研究の方法

(1)看護系大学院修士課程に在籍する学生の授業過程に対する評価基準の質的帰納的解明

①看護系大学院(修士課程･博士前期課程)に在籍する学生に郵送法及び対面により研究協力を依頼し、質問紙を配布した。配布した質問紙は、授業を評価する視点を問う自由回答式質問と対象者の特性を問う選択回答式質問からなる。質問紙の内容的妥当性は、パイロットスタディにより確保した。

②自由回答式質問への回答を、看護教育学における内容分析（舟島なをみ,2010）を用いて分析し、授業に対する学生の評価基準を解明した。また、解明した学生の評価基準、すなわちカテゴリの信頼性は、２名の研究者によるカテゴリ分類の一致率を算出し検討した。

(2) 看護系大学院修士課程における授業過程の質を評価するスケールの開発

①(1)により解明した学生による評価基準を基に授業過程の質を測定する質問項目を作成し、スケールを構成した。

②看護系大学院修士課程の学生の授業を担当する教員に研究協力を依頼した。研究協力に承諾した教員は、授業終了後、受講者である大学院学生に授業評価を依頼した。調査協力に同意した大学院学生は、作成した『授業過程評価スケール―看護系大学院修士課程用―』を用いて授業評価を行い、その結果を無記名で回収箱に投函した。その後、授業提供者である教員は回収されたスケールと評価対象となった授業の概要を問う調査紙をともに研究者に送付した。

③回収したデータを分析し、『授業過程評価スケール―看護系大学院修士課程用―』の信頼性・妥当性を検証した。具体的には、項目

間相関係数の算出、各質問項目を除外した場合のクロンバックアルファ信頼性係数の変化の確認、I-T(項目-全体)相関分析、基準関連妥当性、既知グループ技法による構成概念妥当性を検討した。

【引用文献】
・舟島なをみ(2010)：看護教育学研究，223-261,医学書院.

４．研究成果

(1)看護系大学院修士課程に在籍する学生の授業過程に対する評価基準の質的帰納的解明

①全国の看護系大学院修士課程に在籍する大学院生 535 名に質問紙を配布した。回収は、304（回収率 56.8%）であり、有効回答 299 を分析対象とした。回答者 299 の背景は、平均年齢 35.2 歳（SD=7.8）、臨床経験の有 281 名(94.0%)、無 5 名(1.7%)、教員経験の有 72 名(24.0%)、無 226 名(76.0%)、現在仕事をしている 71 名(23.7%)、仕事をしていない 51 名(17.1%)であった。また、調査時までに履修した科目数は平均 9 科目であった。さらに、在籍する研究科の種類は看護学 141(47.2%)、保健学系 74(24.7%)、医学系 61(20.4%)であり、大学院の所在地、設置主体は多様であった。

②299 名の記述は、1,431 記録単位、299 文脈単位に分割できた。このうち授業を評価する視点として明確に記述された 1,242 記録単位を意味内容の類似性に基づき分析した結果、大学院学生が授業を評価する視点 51 カテゴリが形成された。看護系大学院修士課程の学生が授業を評価する視点は、＜学習成果の発表と討議の有無＞＜教員の態度の適切性＞＜学習成果に対する教員からの助言・評価の有無と適切性＞＜授業形態の多様性＞＜授業への印象の良否＞＜目的・目標の明瞭性＞＜大学院生と教員間相互行為の量の適否と質の良否＞＜抽象と具象の連関＞＜学習ニードと授業内容の適合度＞＜教員の話術の巧拙＞＜授業内容の実践への活用度＞＜資料（教材）の量の適否と質の良否＞＜授業目的・目標と内容の一致度＞＜授業内容の難易度の高低＞＜討議の質の良否＞＜教員固有の意見の有無＞＜新たな知識獲得の可否＞といった 51 視点に集約された。カテゴリ分類の一致率は 70%以上であり、大学院学生が授業を評価する 51 視点が信頼性を確保していることを確認した。

(2) 看護系大学院における授業過程の質を評価するスケール－修士課程用－の開発

①大学院学生が授業を評価する 51 視点と文献を照合し考察した結果、大学院学生が授業の「計画」「過程」「成果」の３側面と、授業への「印象」の良否により、授業を評価していることを示した。

授業の「計画」を評価する視点は、＜教員の専門性の高低＞＜クラスサイズの適切性＞＜授業に参加する大学院生の多様性＞といった５視点を含んだ。

授業の「過程」を評価する視点は、＜授業計画の明瞭性とその提示の有無＞＜目的・目標と内容の一致度＞＜授業計画に沿った進行の可否＞＜授業形態の多様性＞＜専門用語の活用度＞＜教員の話術の巧拙＞＜学習課題の量の適否と質の良否＞＜大学院生と教員間相互行為の量の適否と質の良否＞＜学習成果の発表と討議の有無＞＜教材の量の適否と質の良否＞＜授業内容の実践への活用度＞＜授業内容の難易度の高低＞＜教員の態度の適切性＞といった 36 視点を含んだ。

授業の「成果」を評価する視点は、＜目的・目標達成の可否＞＜新たな知識獲得の可否＞＜自己の経験客観視の可否＞＜新たな発見の有無＞といった９視点を含んだ。

これら３側面のうち、大学院生が授業の「過程」を評価する 36 視点に基づき 37 質問項目を作成した。

作成した質問項目は、「1.授業の始めに学習内容や方法の説明があった」「2.教員は事前に示した計画に沿って授業を進めていた」「3.授業の目的は明確であった」「4.授業の目的に沿った内容であった」「5.授業の要点はわかりやすかった」「6.授業の内容は過不足なく厳選されていた」「7.順序立てて学習できるよう構成された授業であった」「8.学習成果の発表や討議など複数の学習活動が取り入れられていた」「9.大学院生の意見や討議内容に対して教員から適宜助言や評価があった」「10.教員による一方的な講義ではなく発言や質問の機会があった」「11.授業に参加した他の大学院生の意見や経験を聴く機会があった」「12.授業の内容は難しすぎることも易しすぎることもなかった」「13.理論と実践を関連づける説明があった」「14.看護実践や教育に活用できる内容であった」「15.興味や関心を喚起する内容であった」「16.授業に参加しなければ学べない内容であった」などであった。

これら 37 質問項目への回答のし易さを考慮し、授業の順序性に基づき、類似した内容を問う質問項目を連続するように配置し、『授業過程評価スケール－看護系大学院修士課程用－』を構成した。

②看護系大学院修士課程の学生の授業を担当するのべ 39 名の教員が研究協力に承諾した。承諾した教員に『授業過程評価スケール－看護系大学院修士課程用－』と授業の概要を問う調査紙を郵送し、授業評価の実施を依頼した。その結果、39 授業 248 部のスケールの返送があった。このうち、スケールの 37 質問項目すべてに回答のあった 38 授業 237 部を有効回答とした。

③分析対象となった 38 授業が開講された研究科の設置主体は、国立 16、公立 15、私立 7 であり、所在地は北海道から九州沖縄を含んでいた。また、授業科目は、看護理論、看護

学研究方法論、看護管理学、看護教育学、高齢者看護、病態学などであり、平均受講者数は7名（SD=6.1）、授業形態は講義、グループワーク、学習成果の発表や各々の組み合わせであった。さらに、授業を担当した教員の職位は、教授21名、准教授17名であり、修士課程の教育経験は、平均7.3年（SD=4.7）、年齢は、平均50.2歳（SD=6.3）であった。

各授業を受講した237名の学生の性別は、女性203名（85.7%）、男性34名（14.3%）であった。

有効回答237部を分析した結果、『授業過程評価スケール―看護系大学院修士課程用―』は、内的整合性による信頼性、基準関連妥当性、および既知グループ技法による構成概念妥当性を確保していることを確認できた。

『授業過程評価スケール―看護系大学院修士課程用―』は、大学院の学生が評価者となって、提供された授業の過程を評価し、その結果を教員が解釈し、次の授業過程の改善に役立てるという目的を持つスケールである。『授業過程評価スケール―看護系大学院修士課程用―』は、教員が自己の授業に問題を感じたときや、改善点を見いだしたいと考えたときに、いつでも活用できる。同一学生を対象とした1科目の授業に反復してこのスケールによる評価を実施すれば、実施した結果を次回の授業計画に反映でき、効果的な授業を展開できる。

(3)今後の展望

著書『看護実践・教育のための測定用具ファイル（第２版）』（舟島なをみ監修、医学書院、2009）の改訂の際に、開発した『授業過程評価スケール―看護系大学院修士課程用―』活用に向けて、スケールの概要、構成、作成過程、信頼性と妥当性、測定の方法、測定結果の解釈、限界と留意点を掲載し、研究成果の普及をはかる。

また、「授業成果」に焦点を当てた評価スケールを開発し、授業成果と授業過程の評価の両者を包含した看護系大学院における教育評価システム構築を目ざす。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計２件）

① 中山登志子、舟島なをみ、学生の授業評価視点を反映した質問項目の作成「授業過程評価スケール―看護系大学院修士課程用―」開発を目ざして、第19回大学教育研究フォーラム、2013年3月14日、京都大学

② 中山登志子、舟島なをみ、看護系大学院修士課程に在籍する学生が授業を評価する視点の解明、第32回日本看護科学学会学術集会、2012年11月30日、東京国際フォーラム

６．研究組織

(1)研究代表者

舟島　なをみ（FUNASHIMA, Naomi）
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号：００２２９０９８

(2)研究分担者

中山　登志子（NAKAYAMA, Toshiko）
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号：６０４１５５６０

(3)連携研究者

井上　智子（INOUE, Tomoko）
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授
研究者番号：２０１５１６１５

古川　文子（FURUKAWA, Fumiko）
静岡県立大学・看護学部・教授
研究者番号：７０３４２３４２

中村　惠子（NAKAMURA, Keiko）
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：７０２５５４１２